うら見の草編 下

特
へ遠13
841
165止

遠へ13
門
號 841
巻 15

明治三六年
十月十八日
購求

春色梅美婦祢巻之十五

江戸 爲永春水著

第廿九回

古今の國ゆゑ世存知の那丹次郎が侘住居せ〜其時次にへぐ〜と今湯帰りの呆八が近込まんと世一豆元は落敗る奔を子ふ取り見まゝ

丹次郎

あ下ん

ト上書をす〜うるゞたや身ども人あ解きく ひきど
つけうる 粉さん 乾 うれば 今 屋きしを 丹次 帝ゞ 森
祖心 落せ〜 ものの 色 ん ゆかるる 女 と ふ〜 ひらけば
ひるる そ ん 形〜 の の 人 まり いまく 意 ゆ〜
ゆ 見 の ゞ の う 家 身 の う 家 の の ひ 手 続
ひ〜 う く い ん ば 少 地 の 二 階 ま ぐ く 生 の
や ど 頭 の 上 〜 〜 た 波 ま け も い ゆ 家
第 下 人 先 ま 法 方 〜 み く 此 人 と

ゆつ所よ島屋 ん く 出 ん ち ん つ く
ト 小形の 泉紙 ゆ 書 ょ う 人 ま く 見 ゆ り し 廊 廊 者 ゞ
ま 跡 ゆ 絵 ま ひ ら ぜ ま 第 八 ハ 絵 ゆ ギ ッ ク リ 驚 り 美
う 剛 の 森 廣 第 ゆ ま ひ げ つ く ち の 修 ゆ 小 池 を
き く ん ど 弦 出 〜 ゆ く 備 も ち の 頃 脚 美 川 ゆ 小 花 と
ゆ る 料 理 屋 の 主 人 ゆ 二 階 ゆ 分 ゆ ん ち ん ま と せ〜

嘶し声
丹さん今母さが言ふ通り田舎の
叔父さんが尋ねて来て私の躰を身まくみしに
やり方と言ふて七指出とのふ金を出しく呉
ると心ありまして云ふ丈に私が足を洗ふて素人か
さへ方やア又叔父さんの方心かしぐらひの
元手を出しく母さと私が口養居るやどのか
商ぐもさせて呉らうと言ふン心ありまして
私きやア米八さんとのふものひるお前さんを横

取をなし米八さんと顔を赤ら合ふさのを今と
ふん考へて見ると仇招も涙ふん沢心ありまして
ふら実ぐ米八さんみひとりの親換を立させと
ふ私心私が身接を為ふいぢやア氏和歌町ぐ脚
掛者と些しア顔も知ふまと者がひんまり意気
張のふん喧嘩ぐと出と踏まぐも言ふまを稼ふふる
のも口惜いし又那様ふ涙ませんふら氏度の
七十両ぐ米八さんの身請をなし迫る相度ふ母さも

嘆　今を為く　今善孝さんを頼んで中裏の親
方が掛合に来ん続うふるまい　うゝ　はるも島
渡お世話　よしと通りお前さんハ茶八さんと同座ふ
うんに分振ふも為く取りでひとお呉んなれバ支度
私の顔も立　全内ふやア　又叔父さんと相談を
為に私も為接のするやうふりやア茶八さんと同
座ふうんお前さんをたるふまるゆもうりませう
ゝ西相談が出来さうに心茶八さんお茶さんの

ハ　私のお心の通る安うふ冥く世話しくお呉ん
なしヨ　全体　ものを茶八さんふもたやく世話
ゝに成りまして　けれども那通りの氣性ゞゝ
此度私ふ義理を為く　浮ハ考るまいと
思ひまゝうゝ変の寃ハ仕事ハ那廃ふ
沙法すの方が宜うらうと支ハ先刻の為ふ
茶ふ　沙法すと書く進ん心ハ成りまして
丹へするやどお茶のお意気ハ極美しい決ざけま

ども支拵まぢふ為うい〻も顔の変わるもの
り人ぢやアれ人ゝ尤ハ氏身の口ゝ分方を
分板とも言ひふくい狀ごけまども打角叔父まんぐ
大故の金を出しゝく お茶を身傾へ為ようとい
金を他の変ふ考ちやア ぢゃへイエ ちやアハ母云
も種〻相談をしちのうでなりまヨ。ノウ母云へ
アイサ臺田舎の叔父とのハ私の事でどざる
まいがおしのうゝ中遠ふ為ゝ久しゝ音

信不通心居りまゝと所ゞ乙人ふ事を存ふふ隨って
落合いと意地も拔け両方ゞ為ゝしゝ男って
居る所へ今度孫舎へ用ゞ出来ゝ事ゞ登って
来まゝとんざゝう昔の意根をちなり持って
猿の身拔ふ大故の金をも出しゝく異まゝで
どざるまゝがゞ尤ハ使乞者ゞどざるまゝ
ゝ猿ゞ茶八ぎんふ義理をちる恐しをまゝバ
吃度武猿の顔の立丈の事ハ乙ハ異まゝと

あ吉
ふ八

ちよう

男ひきんくらい　今年　娘を　人中ぐ　流石人和歌町の
娘娘右ざと言せるやうふしたのまーと言うまして
今文丹次郎も止めうねる打ことちまと二階格子の
ひよりしく　来へ娘右さんお茶さんの顔ふ　私が
吹度言まんヨト言ひくく一百人入来る茶八後ふ
づいく桜川善孝　善へモシ娘　柳右さんお茶のお教の
ふへ中裏へ抓合つて貰尾よく方をつけやーと
くう安心しく　お呉んを人祭うしと知ぐ折よく

茶八きんふ達ひ中さくう一伍一什の物語をしく
同乗ふ連く来り中さ　なへヲヤ祭うしひりまくと
宅ふ有　私ハホンニ茶八さんお茶さんの気じゃア出
ると仕方ごとお男ひぐもひりませうけまども何年
私の心をも豪しく不猛しと　お呉なさのヨ　茶へどの
ちくく　お茶さんの心意気を関ちゃア自分の
身が恥しくひりまヨ正直の方八先刑場くう
帰りげふお茶さんの所くう丹さんの知へ行く

命を捨てて罪なく見えるバ身のうえの仇相淡ら
しく為ん〻〻茶屋へ入り法事心小池まぐ来く
お吳さんとの文言ばゝ新入りの人を知らべ
クット疾ゐ来くなぜも私を出し接てお茶さん達が
冥りをおのゝ〻と思ひまし〻うゝ小池の二
階へ往って思入言って参らうと抜出しく来る途で
善孝さんが陰くの出しを為て お吳さんとうゝ〻でうゝ
ヨト言ひうけて善孝の方を見えう 茶屋見うう

私の思ふ所ハ茶さん言って お吳さんとゝ
呑込で居やと言ひ所 搬さん お茶の心意気を
出し〻 ようの字も大よろこびで 盤うもで思って お吳
さるるをうゝ私の事 陀文ハ 婀搬さんうゝ 賛
斗をつけて 賞ひませう其 都りみやゝ 婀搬さんの
身うけハ私が為るゝ陀文も 請取って お吳さ
きるやうゝ 和合へ 這入って 吳ろと 茶屋の 頼みゝ
何 拵 〻〻〻 みて 〻〻〻 私の方のを 笑こけて

お吳さまこそ久米さんのお養ゞ私が身儘ふるまつて
私ハ為ても お吳さまとバどんなふ嬉しひ縁もせんヨ
米八 夫じやアマア米さんの浅文を七十両と引換へ
米さ 持て来やしと うふお米のまうら米さんハ嫁し
うゝ人ト 年季浅文をさ〜出せバ 夫じやア米さん
私の顔を 〜 黄ろ〜 お吳さまるゝ 米八 成程ふ
米さ 黄ろ〜 まるヨ きりゝ みやア 私の遊るのも元ツて
お吳さまヨト 懐ろ 柳橋の 年季 浅文を

元いごゝ 波ふ 〜 一座の人〜 米に利益ある米
八ゝ 今 〜 大金を 預達ハ なるまゝ
きを 如何〜 柳橋 吉の身の代 金をとら〜
実ハ 髪ひ 晴ざ五ハ 思ひうね 丹次郎 丹 コウ米八
今 とゝ ちやア 何方の 異 夏をまるでも 人ごゝ
柳橋 吉ゞ 自分の 為 清を止ふ 〜 お米を身 修ふ
為 と 言ハ 宅ふ 見 ゆげ 公 意 乳 夫 お米ゞ
素直ふ うけて 返乳ふ 柳橋 吉の身 清を為て

やるとハ意気張づくみゝ元ゝちやアきを通りの沢ざ
けまども柳橋者の男清ざらにたゝと金ぞハ出来
めゝが其金ハマア分張しく出来さのゞ茶へお茶さんゝ
借りきゝ　コヨ丹コウ分をを言ふのゞを分張して氏男が
金を　茶アサマア宜くお供をしたいヨ柳橋さんの
志が嬉しいゝ一回男清を為て貰へゞ私の髪ハ
お茶さんの物でなりきせう全髪を又借て直ゝ
以茶の通りの抱女ふるに失ぜ柳橋者さんの
身情を為うんでなりきるゝ為うきまバ柳橋
さんの顔も立私の男ひも通るゞやアなりませんゝト
言ハまに皆〳〵感心せ〳〵が皆〳〵茶さん私きやアお茶の
利発ゆアなるしても叶ハるヨ丈ざけまども柳角
私がお茶さんをトいふを引取り善孝が善〳〵コレサ
なの字お茶の心もよの字の意も氏身アなに初
ゝゝ知ゝて居るゝゝ迎も両方が意気張づくお茶め
男ふきゝみるゝと男るさけまども山の姫呪の

たのもしさハ表向ハ美しく附合ひとも互ひに相ハ
一相がいろぐ〳〵いろ〳〵と思ひのかの御姿さんが今
度の縁に候今茶さんハ勢うせどとも色ぐ互の
信実が表方へ一ハ合へバ中へ遠入ること甲斐が
なると支ぐ新ういふ沢ふ為ぐ方お茶の顔ハ互ひに
おやアれへ〳〵いろ〳〵支ハ勢うぐもなりまたけまども
茶さんを又抱女ふ為ちやや物張もひが流ふい
子エト獨りなを痛る物しも茶へ御姿さん〳〵

アレサ羨ぐもお見のうへ大そううのさまてお在ごヨ
トゆり起さまて見て〳〵ヨヤ今のハ羨ぐ
なりまし〳〵うろ子エ茶へ物寝をおるのうへ私きやや
今お由さんが梅を見ぐら逗鳥の峯さんの
別荘へ大勢連ぐ住く〳〵ふと言りぐお在ごうう
お茶を捜ひお本さのごヨト言ハまて御〳〵御姿
吉ハ人知地みぞうりふける
什麼御姿吉ぶ物のうまバうる羨をバ

見〳〵ぞとのみ以前脇差川にはりしき
男を弟に意を結より山の茶屋にく
其八と大弟倫子〳〵るのちハ歌同士の
ぢく〳〵りしが程なく娘夫ハ病気づき
〳〵義の形ら恩を捨て其八が
引清て見縫る金信切のうたと
〳〵丹次郎が世話ふり新安と
善とふつけてなる卒〳〵て其八ハ昔の恩を
報ぜんと思ふ

見〳〵ものうるべし〳〵

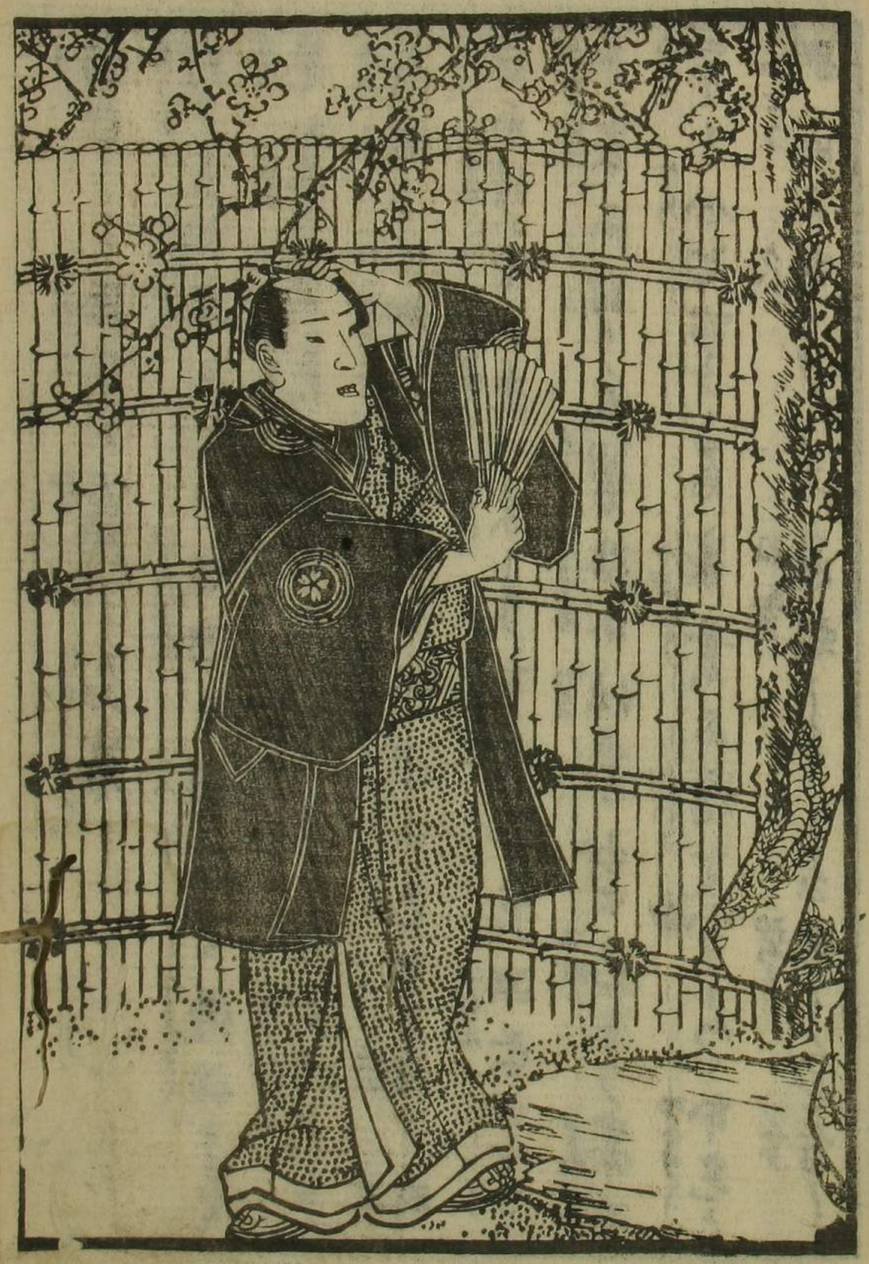
○此時丹次郎ハ本家へ帰来〳〵お蝶と其八
ハ本宅ハ売ハ別宅させ〳〵皆
腰も〳〵善を辰巳の園の弟四郎ハ委
〳〵著〳〵変ども肩尾の前後をるハ
より肩宮見武びあんと再び遠田ハ死
せり

第三十四

備も お糸と房若ふ打の内のあぐりきめて小梅の
お由が出せ〜ぶり彼お条の身のうえハ市弟
三郎が引清て義弟義三郎と相淡のうえ彰弟の
万吉より お条の母へ言入きまるバ柳川亭の母
親ハ腹を一個拾ひ〜ど〜金よりこび大うこうぶ
早速峯次郎の母ふも報知て相淡ハ及ぶ程に
今度ハ名ふ義ふ義三郎と市弟三郎が世話うまバ

女だりの了簡ぢハ返若もありがゝく余義なく
峯次郎の父ふも報知て お条お房が身の清りを
如何うきんと接合へバ父も昔ハ小金もつゝひし
通者の家うまバ今更ふ此言も言ハど此上ハ藤
兵衛と市弟三郎ふ任せるなりぢ お条お房の身の
行付又峯次郎が氏素とも放埒のうき極みとく
きゝへて下さるうふバ金子のところハ何程ありとも此
方ふて出さんうまバ見苦しくうきふ汝斗ひ

梅小路
妓男美婦
迎ひの
お荘ふ
集會す



類ひとし 返事ハ及びしく藤 義と市郎義ハ
種〻と相談のうへ 逗湯の別荘を種板しく
先お条 まず毛ハ移らせお房 も 婦 多川より
引取りて 柳川亭の母 倶ハ毛 も 同じ 別
荘ハ住人世お条ハ素より本妻 うまれ以来のぢく
本家ハ ひとりて 男 拍ハ仕 ゆるゆぞ 毛より 筆次
郎も ひをひらうる家業ハ精を出しつく本宅と
別荘ハ 取りく〻ハ 病起しく ゆる 聴しうぞ 善し

けるを 悪角 ゆるるハ其 年も 善毛 又 立帰る 新玉の
梅 咲く 春と ありしうぐ うる 毛度 身と ありしも
義 義 支 婦と 市郎 義が 一方 うるハ 信切ハ 厚き
世 ハ ハも ありうるるの 毛 毛の人を たづめとしく
初 己 人〻を 梅見 ぐ〻〻ハ 招うんと 其 中を 編 まハ
世ハ 日 逗湯の別 荘へ 寄り集つ〻 人〻ハ
千葉の 義 義 小梅のお世 四谷の市郎 義 同 娘 小梅
丹次郎 お蝶 八十八 茅八 柳 船 吉 ハ

元トラウ

判次郎　お糸（お糸の判次郎の妻と）　お園（お糸の判次郎の妻と山の辺に住む）

同新孝　増吉（川のげんや）　今八（清元延津賀）　桜川善孝

和十　色男の人を招として猫が

地ゆも　奥女大勢連れ入来れば彼別嬢は峯

次郎　お糸お条お房等八変と見るより出迎へ　イヤ

色八皆さん　お揃ひで寛く来てお呉なるまつまつ

お茶さんがさんを連て来て呉まつとお言ひなる

梅暦以来お知己ゐること人を大方誘ひ合せて

来まし　ヨ　房ヘ宅ゐ嬉しいのまつ　条ヘヲヤ茶八さん宅ゐ

結く　茶八ヘ元ち今貝　嬢おやつまう　お茶さん此方を知て

お在クト丸髷ゐ結ひて素人風ゐ　此糸ゐ　横を

さまと　条ヘヲヤ　媚姿ひまし　さん元彼をおるまち

ふらまつ　お房さん　房ヘ私も宅ゐ　お見ぞまし　ヨ

糸ヘ嬢　婆アゐ　ふらまし　ふらまつ　条ヘイエ　どん　ゐ

寛ひ　ゐ新造さんぞ　ござまつ　房ヘヲヤ　お嫁さんもお園

さんも宜く　今貝　園ヘハイ　有難ゐ　お糸さん　も　お条

さんも荷物ゑ　おせ〳〵ヲヤ〳〵大そう出ゑ寧ごノウ　房へ
ヲヤ御御　御者さん　八ヱ　茶八へ今外方心お茶坊ゑ小便を
やらせ　居るヨモウ〳〵子持ゑ　ちやアいく〳〵ゑい子
嫁へヲヤ　ゑと耳が痛い子ヱ　舞　蓑へ　踊るヨ　ゆごたへイヽヨお嫁
さん　先ゑ　お在茶八の　腰　拍　ヲイト　鍋と大きな声心
ゆゑ　〳〵ヲヤ　義ヱ　イヤハヤ　騒〳〵しい　家ぐ　此人数が　一く
挨拶ヱ　ちやア　作者が　嬉　ね　う　先上人　揚　ゑの
ヱ　ゑとるがゆゑト　ゑ　ゑ　〳〵　家　蓑へ　通　ゑ　ゑ　く

用意の酒肴を所狭まに並べ公を尽せ〜賓客ゑ盛の数
きまるゑ　ゑ八ゑ　ゑの　藝づく〜　ゑ　ひさぐ　梅の　ゑ　幾世
うされた老松の　末の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ドウ〳〵ゑト　ゑ　家のうちゑ　納ひる　筆　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
梅暦　ゑ　ゑ　ゑ　十　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

ゑん

春色梅美婦祢巻之十五大尾

販元　文永堂主人